

5 発見しにくいいじめに対して

<グループ内のいじめ>

普段子どもたちは互いにふざけたりじゃれあったりしていますが、遊びの中に一定のルールがあり、平等に役割の交代があります。遊び仲間のグループ内でのいじめでは、ふざけ、いじわる、からかいなどで役割が交代せず、次第に支配・服従の関係ができ、特定の子どもがコントロールされるような状況に陥ります。その後、暴力行為など、いじめがエスカレートしていきます。見えにくい遊び仲間のグループ内でのいじめについてもサインを見逃さず、早期にいじめを発見し、適切な指導をすることが重要です。

<「いじる」「いじられる」>

自分の失敗や欠点をわざと言って受けをねらう「いじられる」行為、それをあげつらって笑う「いじる」行為は、時として「公然と行われるいじめ」になります。いじる側に悪意があったとしても、笑いを取るためと正当化され、いじられる側も拒否しにくくなり、次第にエスカレートします。不適切なコミュニケーションを「いじり」として容認せず、適切なコミュニケーションについてしっかり指導する必要があります。

<インターネットを介したいじめ>

ネット上のいじめは短時間で不特定多数が関与する可能性があり、本人の自覚のないうちに深刻な状況に陥ります。掲示板、ブログ、プロフィールサイト等への誹謗中傷の書込みやメール送信等、ネット上のトラブルを防ぐには、情報モラル教育の充実とともに、家庭での取組みが欠かせません。家庭内でのルールづくりやフィルタリングによる安全対策の徹底を啓発する必要があります。



<いじめのメカニズム>

大阪市立大学名誉教授の森田洋司氏によると、いじめはいじめの「被害者」、いじめの中心的な「加害者」、いじめを面白がる「観衆」さらに「傍観者」の四層構造から成立していると考えられています。この構造では、観衆は直接は自分で手をださず、周りでおもしろがりはやしたてていじめを積極的に認める「いじめの加担者の役割」を果たし、傍観者はいじめを見て見ぬ振りをして「いじめを黙認し支持する役割」を果たします。しかし、傍観者がいじめを批判的にとらえ、軽蔑し、仲裁者になるといじめの大きな抑制力となります。したがって、指導するうえで重要なのは「観衆」と「傍観者」です。いじめを「加害者」「被害者」の個人の問題としてではなく、集団の問題と受け止め、周りの子どもたちが集団の一員の責務として問題の解決にあたらうとする態度を育てる必要があります。また、見えにくいいじめの早期発見のためにも、いじめられた子だけではなく、周りの子どもたちが教師に相談しやすい関係を作ることが大切です。

